江戸時代の風刺

栃木県立図書館

栃木県立図書館



栃木県立図書館

江戸時代の風刺

前田雀郎

前田タカ氏寄贈

栃木県立図書館

江戸時代の風刺

前田雀郎

江戸時代には徳川幕府の圧政下いわゆる〝落首〟が流行した。庶民大衆のせめてものレジスタンス（抵抗）である。去る二十八日から三日間の「趣味の手帳」で、川柳作家の前田雀郎氏が「江戸時代の風刺」として、当時のあまり知られていない〝落首〟を紹介した。以下はその大要である。

寛政以後盛んになる

〝落首〟の発生とその性格

「江戸時代の風刺」と申しましても、当時の文学のすべてにわたってこれをさぐるということは、なかなかの大仕事なので、あまり人に知られていないそのころの「落首」というものを取り上げてみようと思います。

まずこの「落首」という名ですが、これについてある人は、うつかり銭湯で将軍さまのうわさをしても縛られるという当時、この種の風刺を試みるということは、大きな危険を覚悟しなければならない。それで首の落ちる覚悟のいる歌、すなわち落首であると申しておりますが、これは少々うがちすぎておりますようで、落首の「落」は、落しおく、または落ちていたというような心持のもので、「首」は申すまでもなく、詩歌の需数を示す言葉であります。したがつてこれは、いわば「読み人の知れぬ歌」ということにもなりましょう。これは古く、この種の風刺的な読み人知れぬ作品が、多く二千一文字の短歌形式を借りたところから、この落首という言葉は生まれたのではないかと思われます。

そういう意味で、松平定信の「文武奨励」を風して大田蜀山人が詠つたといわれる狂歌



世の中に蚊ほどうるさきものはなし

文武という形で夜もねられずという形式のものこそ、落首と呼ぶべく最も正しい姿のものではないかと考えられます。

一体この落首というものはいつころから盛んになつたかと申しますと、現に鎌武のころ、そういうものが京都に行われたことが、もこの本には見えています。しかしそのころは江戸時代のようにだれも彼もということはなかつたようであります。

これが江戸時代に盛んになつたのは、ようやく庶民に政治的関心が育つて来たということ、まずこれが第一でありますが、もう一つ俳諧とか、川柳とか、狂歌とかいう庶民文学の普及から、大衆が、わが思うところを整理して、ある限られた文字に託す術を覚えたことも働いております。

スバルタ原稿用紙 20×20行

栃木県立図書館

きらわれた水野越前守

だが一方には同情の〝落首〟も

非常に面白いのは、寛政以後においてこれがいよいよ盛んになつていることであります。寛政と申しますと、前にもちよつと名の出ました松平定信、後の白河楽翁が田沼意次に代つて幕政を執るようになつた時で、世に「寛政の改革」といわれているように、この方は前代の田沼によつてすつかり乱れた政治や風俗を、根本から矯め直そうとして献身的に働いたので、名宰相の名さえあります。

本来ならば、田沼意次時代にこそ、こういう落首は盛んに行われて然るべきであるのに、余りそのことがなく、かえつてこの高潔の人、定信の時にこれが盛んになつたということは、当時の大衆の政治への関心というものが、どういう受け取り方において持たれていたかということがうかがわれるとともに、また落首というものはどういう心持で生まれるか、それも後に定信によつてその集「柳多留」から削除を命ぜられた。

役人の子はニギ〳〵をよく覚えとか

いろ〳〵に扇を使う奉行職

というような句が平気で行われていましたから、ある程度庶民に腹ふくるる思いを、文字、言葉につづらず託す自由を許されていたのであります。こういう時世に痛烈な風刺の生まれるわけはなく、落首というものの燃え上らなかつたこともうなずけるのであります。

歴史の正しい批判の上からは暗黒時代であつても、寛政に先立つ安永、天明というこの田沼時代は庶民には暢気な、むしろありがたい時世だつたに違いありません。そこに理想を行おうとした定信の時代よりも、かえつて前の世を恋しとしたのであります。

定信はこの改革で、まず士風、侍の気風を振興せしめようとして武と文を奨励する一方、一般の風紀をしめ、倹約を奨励した為には日常の贅沢品、髪かたちから浴場の施設にまで干渉したので、人々をすつかりきゆうくつにしてしまつた。いえばこれが恨まれたので、そのころのまず定信の政治を批判した。

白河の清き流れに水絶えて

という落首が行われましたが、よく当時の大衆の心持を伝えるものと思われます。

田沼時代は、上がワイロ、ワイロで日を送つていたので、自然下の方も緩やかになる。こんな風な時世だつたに違いありません。そこに理想を行おうとした定信の

こういう風に、庶民の口を力をもつて閉じたところにも、落首流行の、一つの素地がつくられたともいえましょう。寛政以後、日本は内に外にいろいろな問題が起りいよいよこの落首が盛んとなつたわけで、私の話も、この寛政以後の作品が多いということをご承知いただきます。

まず、庶民の生活方面における恨みの声から申しますと、文化十年の正月、

サンズイに酉の年とて売る酒も

つくりはやめて扁ばかりなり

という落首が江戸の町に行われました。これは各地凶作のため前年来高騰気味にありました米穀類の値段が、この文化十年の正月になりますとういに、お米が百文につき四合、ひき割麦、丸麦の類が四合五勺という相場を見せ、これに伴つて、清酒が一畝、金にして五両という高値となり、その嘆きを訴えたもので、ちようどこの年が酉の年だつたので、酒という字からつくりの酉という字を除くとサンズイばかりとなる、すなわち水ばかりだというのであります。

文政八年六月十八日、将軍家斉が太政大臣に任ぜられました。江戸に居ずわりのまま京都へ出かけずに太政大臣になるとは古今未曽有のことだというので、御用学者などの昇格を大いに称えましたが落首子は

上落もせずに太政大臣は

これぞ武将（ぶしよう）のはじめなりけり

と笑いました。この太政大臣就任に、諸侯はお祝いのため第一礼装で総登城ご挨拶を申し上げましたが、この時、弘前の藩主津軽越中守信順は、乗り物に興を用いたためおとがめを受け、翌四日、閉門百日を仰せつけられて大きな話題を提供した。それで

気の毒やをあげこしの津軽どの

晴れは一日　恥は末代

という落首が行われました。

天保四年、またまた諸色の値上がりに、これに対する嘆声としていろいろな落首が出ましたがそれらの中に

米のなき身にはあわれを知られけり

麦たく江戸の秋の夕ぐれ

というのがあります、これは西行法師の「鴨立沢」の歌をもじつたもので、かつて貧しき人は妻を食えとのたまわつて問題を起したなにがし大臣に、そのまま呈せそうな歌であります。

天保八年二月、大阪で大塩平八郎の騒動が起きると、仁徳天皇の「高き屋に」の御製をもじつた

石火屋にのぼりを見れば煙り立つ

民を救ふと書きつゞけりけり

というのが早くも大阪に行われましたが、この騒動に対する地元の民衆の認めがよくうかがわれるかと思います。ところが、この一件落着のころ、江戸に行われたものを見ると

平八の頭を切つて万民の

気も安ふなる米といふ文字

とありまして、なるほど平の頭を切つて下の八を結べば「米」という字になるわけで、考えたりなと感心はしますが、そこに何か遊びが見えて、これほどの騒動に対しても、江戸と大阪とではそこにある人の、関心の度に相当のへだたりのあつたことが知れるのであります。

天保十四年九月十三日、宰相水野越前守忠邦、御役御免、押込め

栃木県立図書館

海防の声高まる

喜ぶ死の商人への皮肉

弘化三年五月二十七日、米艦浦賀に来る。これを皮切りに英船、また露船と、江戸近海に外国船の現われること繁くなり、嘉永三年十一月には海防の勅諭が幕府に下るという騒ぎに、国内の人心大いに動揺してまいりますと武具馬具師アメリカ様とソツと云い

という落首が現われました。川柳風の落首としてまったく傑作であります。

万延元年三月三日といえば、井伊大老が桜田門外に水戸浪士その他の襲撃を受けた日でありますがこの時行われました落首も数多くあります、中に

尻でなくアタマをねらう赤合羽

というのがあります。当日水戸浪士達は赤合羽に身を包んで大老の駕籠に迫った、それを取って普通カツパはお尻をねらうものだがこの赤ガツパは首をねらったというのであります。

水府老はいゝ心地じやと首つ切りすえ風呂に首つきりつかつていい気持だといつているのでありますが、このスイフロは水府の老、すなわち水戸の隠居斉昭を包わせたもので、憎い直弼を首にした。そのため後に収賄の罪が発覚弘化二年十月三日、改易、〔家屋敷取りつぶしとなつて、讃州丸亀の京極長門守へお預けになりますと市民は大喜びで、早速こういう落し話をつくりました。

「今度讃州丸亀の金毘羅へ、曲りくねりし、鳥居を納めたるよし。それは木か金か。イイヤとれまで町人をいじめた石だ」

この石は、意趣遺恨などというイシユにかけたもので、つまり恨みの意であります。

このほか、落首の形態には、替え唄、地口、文句取り、見立て、引き札など、まだまだ沢山の種類がありますが、寸鉄人を刺すといつた趣きからはだんだん遠くなりました。

この事件の裏面事情を風しているのであります。

次に落し話の形式をかりた落首を少しご紹介いたしましよう。

天保十二年正月晦日、大御所の名に、現将軍家慶の上にあつた幕政を左右していた前将軍家斉が亡くなりますと、町に次のような落し話が行われました。

「子供、遊び居て、天下大変といふ故に、親父、なぜ手前は天下泰平といわぬといえば、子供それでもシタが廻らぬものよ」

これは大御所が亡くなつたから今まで宰相としてありながら十分に腕のふるえなかつた水野忠邦がいよいよ何をするか、下々が苦しくなるのではないかと早くも人々がそれに不安を感じ出した、その心持を表明したもので「シタが廻らぬ」は日中の舌、ベロと、下々一般庶民のそれの、両方にかけたものであります。

この水野の天保の改革において悪玉にされたものに鳥居甲斐守忠耀があります。この人は水野の腹臣として天保十二年、すなわち大御所の死後、幕邦によつて南町奉行に登用され、江戸の監察官として直接市民の取締りに当り、市民の恨みを買うことはなはだしかつた。

【上の絵は天保改革で水野越前守忠邦が峻烈苛酷の厳令を以て上下に臨み、民衆の怨府となつたことを風刺したもので、一篇の寓意は上は暗く、下は真青という意味である。それゆえ絵の上部の妖怪のいるところは暗黒に、下部は青く彩色されている】



前田愛郎氏は本名源一郎、明治三十年三月栃木県生まれで、川柳をつくるほか江戸川柳の研究をしている。なおラジオでは先年「朝の訪問」に出、また先ごろ「趣味講座」で川柳について放送した。

スバルタ原稿用紙 20×20行

栃木県立図書館

の報が江戸市中に伝わるや、これを聞いて喜んだ町の血気の者達は、同夜更けて西丸下角の水野邸を取り囲み、手当り次第に石瓦を邸内に放り込み、あるいは塀を引倒し、乱暴の限りをつくし、ついに町奉行の出馬を見るという騒ぎにまでなりました。これは忠邦のいわゆる天保改革により、町人もまた重圧を受けていたので、そのウップンが一度に爆発したのでありまして、この時行われた落首の数はさらにおびただしいもので、これのみを上げても「落首の形態」のすべてをここにおみせ出来るほどのものでありますが

世の中の掃除をせよと給わってという作品は、よく忠邦その人を言い得て、風刺の中には多少の同情が見えてところよいと、識者の間に評判となつたようであります

同じくこの夜水野邸の門扉に何者かの手で

此のうちに水いちというあんまあり

上をもんだり下をもんだりとしたためた貼紙がなされましたが、この「上をもんだり」というのは、水野のこの天保の改革は、ただ下の方の者にきびしかつただけでなく、幕府の内部から、大奥のすべてに倹約を励行したことをいつておりますので、その時の挿話として、将軍の家慶が、しようがお好きで、いつのお膳にもこれをつけさせておりましたが、忠邦は、庶民に「ハシリモノ」の野菜など食べること罷りならぬと命令しておきながら、将軍がそういうものを召し上つておられては一般へのしめしがつかぬというのでこれを日々のお膳からのぞいてしまいました。それで将軍さまは水野め、余の口までつめるかと大そうで立腹になつた。水野の失脚にはこの将軍の恨みも大いに働いているとか聞いております。

腰抜奉行を笑う

文化時代の川柳、発句

文化四年五月二十六日、琉館奉行羽太荘左衛門より、同月十八日付の飛札をもつて、オロシヤの船がいよいよエトロフ島に拠つて行動を開始の態勢にある旨を、幕府へ報じて来ましたので、さすがに暢気の江戸人も、何となく不安を身内に感ずるにいたりました。その中から二、三をここに申し上げますむだ骨をおつたがヲロシヤ遺恨なり

これは、これよりさき文化元年九月、魯使レザノット・レサロフとも申しますが、これが長崎に来り、われに開港を迫つたが成らずむなしく引き帰すことがありましたが、レザノットはこのため帰国後彼自不首尾の故をもつて罰せられたことが我が国へも聞こえてお寄せたのは、その時の遺恨もあつてのことであろうとしたのであります。無駄船とはこの長崎における守組の松平外記（高三百俵、三十俵一人扶持）が突然狂い出し、同じく宿直中の沼間石重他二名を殺害、間部源十郎他一名に傷を負わせて自殺した騒ぎがございました。この時同所に居合わせた侍達の狼狽振りはまことに見苦しく、町人達は一斉にこれをあざけつたのでありましたが、その折のものに

太平に武をわすれぬで大騒ぎ

当の松平外記以外は、太平にすつかり武を忘れてしまつていたと皮肉つたのでありまして、まつたく当時の侍というものは、町人風を

れたことか知れませんが、しかも多くはその一とを恥かしながら信じようとした。かえりみて、この江戸人のあざけりの前にじくしたらざるを得ないのであります。

文政六年四月二十一日夕七ツ時（今の午後六時）西丸御書院番部地においてトノイ番の酒井山城

半

文政六年四月二十一日夕七ツ時（今の午後六時）西丸御書院番部地においてトノイ番の酒井山城守組の松平外記（高三百俵、三十俵一人扶持）が突然狂い出し、同じく宿直中の沼間石重他二名を殺害、間部源十郎他一名に傷を負わせて自殺した騒ぎがございました。この時同所に居合わせた侍達の狼狽振りはまことに見苦しく、町人達は一斉にこれをあざけつたのでありましたが、その折のものに

太平に武をわすれぬで大騒ぎ

当の松平外記以外は、太平にすつかり武を忘れてしまつていたと皮肉つたのでありまして、まつたく当時の侍というものは、町人風を

スバルタ原稿用紙 20×20行

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館

栃木県立図書館